適切な子ども支援につなぐ学級経営へのアプローチ

令和３年度入学
熊本大学大学院　教育学研究科
教職実践開発専攻　学校教育実践高度化コース
遠坂　幸子

実践報告書要旨

近年、社会や経済の変化に伴い子どもや家庭・地域社会も変容し、子どもが抱える課題が複雑化・多様化している。その上、日本の教員は幅広い業務を抱えており、立ち止まって省察する時間をもたないまま、業務に追われる状況に陥ってしまう場合がある。そのため、学校現場では課題解決的生徒指導についての対応が多くなり、内面では学校生活で困難を感じている非表出児童の早期発見・早期対応が遅れてしまうことがある。また不登校の主な要因には「無気力・不安」が多く挙げられており、学校生活の中で蓄積されていった子どもの不安感や無気力感に、現場の教員ができるだけ早期に気づき寄り添い、適切に支援が行われるような学校システムの構築が早急に必要だと考える。

そこで、教員をめぐる現状や学校の現状これらの課題の解消を目指し、確かな子ども理解のもと適切な支援につなぐことができるような学級経営へのアプローチの在り方を明らかにすることを研究の目的とした。

具体的には、「ビジョンの共有」「校内支援委員会の体制整備」「担任のニーズと教職経験年数に応じたコンサルテーション」の３つを適切な子ども支援につなぐ学級経営へのアプローチとした。「ビジョンの共有」と「校内支援委員会の体制整備」については、木岡(2007)と柴田(2007)の組織マネジメントの考え方を取り入れた。校内支援委員会の中に「アセス会議」を作り、子ども理解と適切な支援について省察的にチームで話し合うことができる場を保障した。「担任のニーズと教職経験年数に応じたコンサルテーション」については、石隈（1999）佐古（2015）のコンサルテーションの考え方とケン・ブランチャード（2016）の状況対応型リーダーシップ型を参考にした関わり方を取り入れ、実践を行った。また、子ども理解の１つとして栗原・井上（2018）の学校環境適応感尺度「アセス」を活用した。

３つのアプローチを関連させながら実践することは、教職員に悩みの解決や学びの充実、新たな子ども理解、支援の方向性の見通し、チームで話し合える良さ、省察的思考などの影響があった。そして、自信や成長の自覚、実践意欲の向上等の内発的動機付けも刺激されていることが分かった。また、担任が子どもに寄り添い効果的な支援を考え省察的に実施してきたことで、子どもの様子に変容が見られた。これらの取組を通して、本実践では、ビジョンの共有を土台とし、子ども理解と支援について話し合う「時・人・場」を保障した校内支援委員会と担任個人へのコンサルテーションを連動させながら行うことが、適切な子ども支援につなぐ学級経営へのアプローチとして有効であることを示した。

【キーワード】ビジョンの共有　校内支援委員会の体制整備　アセス会議
担任へのコンサルテーション　学校環境適応感尺度「アセス」